



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.158
2016.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第12回 ● 世界に伍する日本考古学の確立

モースの進化論やその弟子たちの土器区分問題という近代化黎明期の幕開けに対し、「1940年以前の先史学」(レンフルー)の参照と本邦学史の比較によれば、坪井正五郎の戦略は進化論にとどまらず、主に史前を対象とする人類学並びに有史の解明が中心となる史学を統合する視座を土器区分として確立し、比較土俗学の援用と共に比較形態学から文化や社会を穿つ考古学の独立を世界に伍して構想している。更に坪井正五郎の戦術である比較形態学は分類に精緻を極め、特に類似の社会論とでも言うべき「類似の形態連携論」の到達点に慧眼を窺る。

世界に冠たる坪井正五郎の大胆な溯源仮説は『日本石器時代人民遺物発見地名表』(明治30年)の「石器時代総論要領」にて「コロボックル思考法」として結論する「日本石器時代人民八幾種族ナリシカ容易ニ知ル事能ハズト雖モ、北海道本州ノ大部分トニ分布棲息セシモノハ一ニ種族タリシ事種々ノ点ニ於テ遺物ノ一致スルヲ以テ知ルヲ得。」の導出に尽きる。比較形態学による精緻な分類は種族としての類似性導出に意義があり、相異はそれを生み出す状況に俟つ姿勢を堅持するが、新たな土器区分となる「弥生式土器」(明治29年)の認識において遂に八木奨三郎が明治39年に南加瀬貝塚で層位的証明を果たす。

蛇足ながら没後は新たな土器区分認識の新展開となり、浸透する層位学の適用を目指す松本彦七郎の出現を嚆矢とし、新古の層位を検証する山内清男は層位と土器区分による年代細別の連環と秩序を図り、日本考古学的一大新潮流を形成する。

一方、日本考古学の土器区分認識論は古く、欧州留学以前の考古遺物に関する基盤研究に遡る。明治20年に「祝部土器の分類」を著し、「貝塚土器埴部土器朝鮮土器祝部土

器」との外来技術を含めた人類史的な土器区分で明らかのように、大森貝塚から陸平貝塚へと展開する「相異の土器区分論」に対し、新たな日本考古学の新機軸を提示し、明治21年「日本考古学講義」では史前-原史-有史を通じた日本考古学の役割について史学や人類学と関連しつつも独立する新領域を構想する。これには同年の「外国人故本邦の事実に暗い所の有るも恕す可き事と致しませう」との吐露も参考になる。

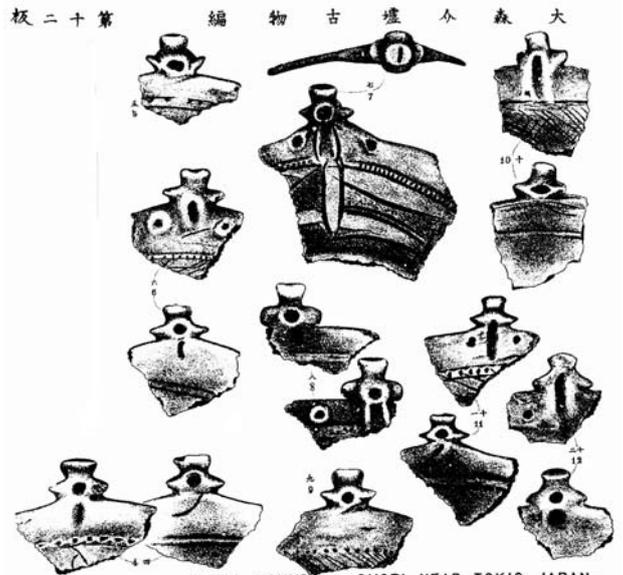
こうした坪井正五郎の土器区分認識は「北海道本州ノ大部分トニ分布棲息セシモノハ一ニ種族タリシ事」を根拠とする種族区分(貝塚土器は「コロボックル」)が前提となり、後述するソネの「土器に二種類有る所以」を経て鳥居竜蔵「同時代異部族説」の原型をなすに至る、との学史を考究する。

では、種族や部族の議論に対し、何故精緻な比較形態学が求められるのか。坪井正五郎は江戸のレトロと碩学のモダンを交差させることができ、土器から草本学の神髄に学ぶ独自の観察と記録、及び体系的網羅的実証的細別分類の構築を図り、神は細部に宿る、との科学的接近法へと世界に伍して到達する。畢竟、「コロボックル風俗考」とはモダンなレトロによる科学の擬態か、未来の企画展であろう。

さて、精緻な分類と大胆な仮説が身上の坪井正五郎にとり、比較形態学の高度化を実践する研究環境の構築は絶対的な使命であり、山内清男も絶賛する常南総北における仮説検証型の貝塚発掘／整理／報告を人類学教室の基幹的

な戦術とする。(未完)のまま報告を中断する西ヶ原貝塚も連載中における椎塚貝塚と阿玉台貝塚の整理・報告指導を通じ、研究相互の状況には著しい発展が見られ、本質的な成果の意義については「類似の形態連携論」の到達点とすべくその発展を後述するので、ここでは前回の末尾で触れたように椎塚貝塚から加曾利B式の学びを急ぎ確認しておく。

椎塚貝塚の成果は「相異の形態相論」と概念化したように、比較形態学を土器群の内部組成構造へと拡張することにより、大森貝塚と椎塚貝塚の土器群の形態には特徴的な類似と多様な相異の両者が層位的な併存を示す現象として導出した点であり、第8回は突起への着目、第10回は「土器の形状」に触れた。共に型式学的に有意、かつ突起は重要な系統的年代的指標となり、具体的な指標としてモースが「図4-12は、大森貝塚で最も普通。」と明記する「十字架形」突起には注目すべきで、該当諸例を第15図に示す。



▲第15図 「大森貝塚で最も普通」を抜粋すると「十字架形」突起

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器	世界に伍する日本考古学の確立(第12回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書	ことのはじまり(第5回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第151回) 馬場信子 …2
■考古学者の書棚	「若い読者のための第三のチンパンジー」 澤浦亮平 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第5回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

3. 製塩土器への注目(その3)

岡大卒業後の私たち、忠彦は3回生の時から倉敷考古館に正式職員として勤めていた。葎子は一年半ばかりは、史学科の副手とかの名目で、岡大図書館で、大学に寄贈されていた岡山池田藩の藩政資料整理のアルバイトをいていた。

その後私も、倉敷考古館に勤務する事になったが、考えてみれば、其の時以来、給料は二人合わせて一人前という状況が一生続いたというのが、小さい博物館での実態だった。

今から60年以上も昔からこのかた、文化財行政も確立していない時代が続いていた頃は、倉敷考古館には周辺で遺跡・遺物の発見や破壊の問題も起これば、ことの大小に関わらず、ただ忙しさに追い回される毎日であった。

そうした中で『倉敷考古館研究集報』にそれらの報告も随時掲載してきたが、中でも6号(1969年10月)にある「児島上之町保育園内遺跡」や14号(1979年8月)の「広江・浜遺跡」では土器製塩遺跡をあつかっている。前者は弥生時代中期の、かなり大形の台脚付土器による製塩遺跡と推定した。後者は縄文時代以降中世に至るまでの遺物を出土している遺跡だが、最も広大な地域を占めた遺物が、6~7世紀代の丸底、当地方の師楽式土器の典型でもある土器群である。

詳しくは報告を参照ということだが、特に後者の遺跡報告の際も、以前から私が問題としていた当地方の製塩土器師楽式土器は、塩を焼くだけの容器だったのか、なぜ小さくて丸底なのかの点までには触れえなかった。だが、かつてからの師楽式製塩土器に対する疑問を、忘れていたわけでもない。

その後、わたしは、1985~2004年の間、神戸女子大に勤務したが、時間の許す限り週2~3日は必ず考古館に行っていた。考古館の経営状況は、代わりの学芸員が採用できる状況ではなかったのだ。

『喜兵衛島』との題名の報告書が刊行されたのは1999年5月、長期にわたる土器製塩研究の総決算であろう。この中でも、わが国の海水利用の製塩においては、海水を濃縮することが、重要との理解はあるが、その方法は、古代の文献に表れる「藻塩焼く」の言葉に遮られたのか、藻利用から離れられなかったようだ。

2000年の5月、神戸市立博物館で「海の考古学」という特別展が開催された時、神戸に通っていた私に、関係する講演を頼まれた。其の時以前より、考えていた備讃地域の製塩土器に関する私見を交えた話しをした。つまりあの大量にある丸底の、せいぜい井の口をすぼめた程度の小形土器で、ぼろぼろになって海浜に堆積した土器は、ただ海水を煮るだけの土器でなく、主な用途は、海水の蒸発のための容器で、最終にそれを、煮詰めるために利用した物だろう。というような事はなした。つまりは砂を利用して海水を濃縮する前の段階として、小さい入れ物に海水を入れて海浜の天日にさらす事は、丸底である事で砂の上で安定し、天日で熱せられた砂の熱と、天日の直射で、青天の多い瀬戸内では大変効率の良い、海水の濃縮法だろう、というようなことだった。

しかしこれは机上の空論といわれればそれまで、この点は長くわだかまっていたことだったので、この年の夏休みを利用して、我が家の庭で全く原始的な実験をおこなったのである。

瀬戸内海の海水を、ポリタンクに汲んできて、手近に有るさまざまな容器を利用し、野外での天日による海水の蒸発状況を、11日間に渉り、天候・温度・湿度、容器の大きさ・器形、入れる海水の量の違い等の記録と共に、毎日の蒸発状況・塩分濃度の違い等を記録した。

これと共に、僅か1日の事だが、師楽遺跡に近い牛窓町の同種の海岸遺跡で、同様の実験をし、庭での実験との差も検討した。わざわざ似た土器を作ったの実験ではないが、むしろ土器よりはかなり効率が悪いと思われる容器を利用した結果であるから、その結果は信じている。買った道具といえ、500ミリリットル入り、メスシリンダー1本と、ポーメ比重計だけである。ポーメ数は含有塩分の%を示している。

海水は3~3.5ポーメ、近代の製塩では5ポーメ以上を鹹水と呼ぶようで、塩田での濃縮が行われていた頃は、15~18ポーメあたりで煎熬がおこなわれたようだ。20ポーメでは一部結晶する。死海の塩分はこのあたりとか。

最も効率の良かったのは、500ミリリットル入り程度の焼きの甘い井状陶器であり、青天にさらすと3日で水量は半減し、ポーメ数も7ポーメ以上になった。こうなると鹹水を合体、空いた容器にはまた海水を入れ、効率よく次々と濃縮。5日目には、3容器を合体して10ポーメの鹹水になっている。

海岸で発見されたような簡単な炉で、10~20個ばかりの鹹水の入った土器を、炭火のようになった火で焚き、吹き上がりそうになれば、また濃い鹹水を加え結晶させていく事で、噴出しのロスもおさえられるだろう。

備讃瀬戸での、製塩土器は、台脚という置くのに安定的な脚を除くことで、むしろ広い海浜の熱砂地を利用して海水濃縮の新しい方法を発見したといえよう。夜間や夕立時には、海岸で遊ぶ子供たちも動員できる。海浜の一角に雨露のかからないだけの小屋掛けがあれば、そこに運び込めば良いだけである。我が家でも当時7歳だった孫が楽しんで毎日の取り込みを手伝ってくれた。

この内容は8月にはまとめて、神戸女子大学史学科の『神女大史学』17号に「師楽式土器再考」として掲載した。これで私の「それでは何だ」のつかえも、やっと解消か。

間壁忠彦 略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

J レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 151

陣屋敷低湿地遺跡 ～ 茨城県美浦村

馬場 信子

霞ヶ浦南岸の茨城県美浦村には明治12年に日本人だけの手により最初の学術調査がなされた陸平貝塚がある。平成10年に国史跡となり、現在は遺跡公園として整備されている。

今から30年程前、陸平貝塚が所在する安中地区に村は地域活性化のための総合リゾート開発を計画し、そのなかで陸平貝塚は保存されることとなり陸平調査会が組織され戸沢充則先生を調査団長に昭和62年に貝層範囲確認のボーリング調査や遺跡範囲確認調査、周辺遺跡の分布調査が行われた。ちょうど大学に入学した年で私は一連の調査に参加することができた。昭和63年の夏、陸平貝塚の北西に位置する陣屋敷遺跡の発掘調査が行われ、弥生・古墳・平安時代の集落跡が確認された。陣屋敷遺跡のすぐ下には谷津が形成されており、集落を支えた食糧生産地である水田跡(特に弥生時代)があるのではないかと期待され、発掘調査が計画された。

年が明け、短い昭和64年から平成元年へと変わった。水田址の調査があると話を聞いて興味が湧いた。期間は20日位という。陣屋敷遺跡水田址として調査が始まったこの遺跡が後の陣屋敷低湿地遺跡で、陸平貝塚からは直線距離にして北西へ500m程の距離である。2月10日の調査初日は雨だった。調査期間中は雨が多くそれが時に調査を困難にもした。遺跡に行くと、谷津頭のU字型をした調査区には水抜きも兼ねた排水トレンチと東西・南北トレンチがすでに重機で深く掘られ、まだ重機が表土を掘削中で工事現場に来たような感じだった。調査は大学院生と私も含めて調査経験の浅い大学1、2年生数名、作業員として地元のおじさんやおばさんが参加した。当時大学院の博士課程だった小杉康さんは現地で指揮をとることとなった。谷部のため掘れば自然、水も湧いてくる。調査期間中は、調査区内を乾燥させるために24時間排水のためおじさんたちが夜も徹してポンプを稼働させて水を汲み上げてくれていた。霞ヶ浦周辺は蓮根収穫日本一ということもありロータスブーツという防水に抜群のスーツがあった。深いトレンチ内などではこのスーツが役に立った。調査前半、鋤簾でひたすら地面を削り遺構面を検出していくが、明確な弥生時代の水田跡はなかなか見つからなかった。足跡状痕跡と思われるマーブル模様状に観察された部分を移植で掘ったが、人間の足というよりもクマの足跡のような感じに思えたりもした。次に訪れたときには東西トレンチでしかも表土層から1mも下から多量の縄文土器片が出土していたのを見てとても驚いた。当時私は仕事をしていたので調査には休みを利用して参加していたのだ。参加するたびに調査が進んでいて水田址の調査はいつの間にか縄文の



▲陣屋敷低湿地遺跡土器集積址(美浦村教育委員会所蔵)

調査に変わっていたのだった。南北トレンチと東西トレンチとが接する部分から西側を縄文調査区として10×11mの範囲だけ掘り下げることとなった。検出されたのは足の踏み場もない状態で広がる縄文時代後期の土器の集積址だった。検出された土器の集積は全体の一部分で土層断面の様子からトレンチをはさんで東側や南側にも広がっているようであった。土器集積址の調査区からは焼土址や焼けた骨片、倒れて横倒しになったカシヤトネリコなどの木材、風倒木痕などが検出された。雨でも調査ができるようにテントやシートを用いて全天候型現場を作ったり、土器集積部分では板を渡してうつぶせ状態での作業—ロータスブーツを着て足場板にうつ伏せになって調査をする姿はまるでマグロのような…と当時、学生が日誌に記している。調査日誌はフィールドの記録という形で学生が最初に記述し、その後大学院生等が自分の記録と学生の記述内容に対してコメントを書く、という交換日記のような感じで毎日大学ノートに記録された。後で読み返すと調査経過がよく分かり、報告書作成にも役立った。学部生の素朴な疑問や感動、様々な記録加味されていて今読み返すと思わず笑ってしまうような部分もあり懐かしい。

調査期間は延長に延長を重ね最終的には約40日間実施された。調査中は様々な出来事があった。雨が多かっただけでなく地震もありトレンチの壁面が崩れてしまったこともあった。ある時は夕方調査から戻って間もなく宿泊していた旅館の数軒先で火事が起きて先輩たちが調査関係の荷物を急いでワゴン車に積み込んだ後、火事の手伝いをしたことも。調査中の宿泊先は隣町の3軒の旅館だったが数日ごとに荷物を持って移動。私は行く度に違う旅館へ赴いた。ある時の夜旅館に到着すると皆テレビを見ていたので何かと思ったら、吉野ヶ里遺跡発見のニュースだった。大喪の礼もあった。その日は調査期間中唯一の休みだったが雨のため先輩は遺跡の様子を見に行っていたのだった。当時、村は記録映画を作成していて調査の様子が撮影されていた。貴重な記録となって今に残されている。遺跡は全体のほんの一部しか調査されていない。調査後、未調査区域も含めてゴルフ場の池の底に埋没保存された。調査終了後整理作業が始まり土器は全て割れた破片で、縄文時代後期前葉～中葉(その大半は堀之内2式から加曾利B1式にかけてのもの)の所謂粗製土器が殆どであること、また石器の出土は数点であること等がわかった。整理作業においても色々な出来事があった。破片だけの土器が最初に口縁部から底部まで接合した瞬間の感動は忘れられない。復元できた個体が増えたことは土器の廃棄や遺跡の形成を考えるうえで有効だった。報告書は諸事情あり調査から22年後の刊行となった。報告書刊行後に美浦村文化財センターで企画展「谷底に残された縄文土器—陣屋敷低湿地遺跡—」を開催した。陣屋敷低湿地遺跡は陸平縄文人の行為を考えるうえで興味深い遺跡であるとともにさまざまなことがありすぎて私にとって特別な思いのある遺跡となった。機会があればぜひ報告書をご覧になっていただければ幸いである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは川村 勝さんです。

考 古学者の書棚

「若い読者のための第三のチンパンジー 人間という動物の進化と未来」

ジャレド・ダイヤモンド著 レベッカ・ステフォフ編著 秋山勝訳／草思社(2015) —— 澤浦 亮平

ヒトとチンパンジー(コモンチンパンジー、ボノボ)の遺伝的な違いは約1.6%。それは、チンパンジーとゴリラの遺伝的な違い(約2.1%)よりも近い。遺伝的な距離のみから見れば、ヒトはチンパンジーと同じ属として分類されても不都合はなく、第3のチンパンジーと呼ぶべき存在だという。それにもかかわらず、約700万年前にチンパンジーとの共通祖先から分岐したのち、ヒトがやがてチンパンジーとは似ても似つかぬ存在(いわば人間Human)に進化していったのは一体なぜなのか、と著者は問い始める。

本書は、ヒトを人間たらしめるものとは一体何であるのか、という問いに対して進化生物学の視点に加え、様々な領域の知見を導入して回答した優れた概説書である。

本書の構成は下記の通りである。

- はじめに 人間を人間であらしめるもの
- 第1部 ありふれた大型哺乳類
- 第2部 奇妙なライフサイクル
- 第3部 特別な人間らしさ
- 第4部 世界の征服者
- 第5部 一晩で振り出しに戻る進歩
- 終わりに なにも学ばれることなく、
すべては忘れられるのか
- 解説 長谷川眞理子

「アルカ通信」の読者は、考古学になんらかの形で携わっている方々か、もしくは考古学に関心を寄せる方々だと思われるが、一つの遺跡を調査してその内容を明らかにすることが人類進化の大きなストーリーの中のどんなところに位置付けられるのか考えながら日々の仕事に取り組んだり、個別の調査事例に触れたりすることはそれほど多くないと思う。少なくとも経験の浅い私の場合はそうだ。そんな私に、遺跡や遺物を多くの研究領域と結びつけながら鳥瞰するような視点を本書は与えてくれる。それは、「ヒトはどんな存在なのか」という問いに対して誠実に取り組んだ思考の跡が本書に明快に記されているからだと思う。若い読者への配慮として随所に散りばめられたコラムも勉強になる。

考古学の分野ではひょっとすると馴染みが薄いかもしれないヒトに関する進化生物学的な観点からの記述が前半には多いのだが、取り上げられるヒト特有の行動様式の事例、特に性行動とそれに関連するヒトの社会性に触れた部分が興味深い。例えば、なぜヒトは隠れて性交するのか?著者は有力な学説を紹介してその進化の理由を示す。ぜひ、本書を手にとってその理由を確認されたい。

ヒトの進化の道筋とユニークな行動様式を概観したのち、

ヒトがチンパンジーとは似ても似つかぬ存在となった所以は、生物学的な数々のユニークな行動特性ではなく、むしろ文法を伴う言語や高度な技術を持つこと、芸術活動を行うといった文化的な側面であることが強調される。これらは6万年前以降になって初めて本格的に花開いたもので、著者は「大躍進」と表現する。「大躍進」が起きたのは、ネアンデルタールとサピエンスが共存していた時期の後半期にあたり、その直後にネアンデルタールは姿を消し、一方、サピエンスはいよいよ全世界に拡散しはじめ、文化の多様化のスピードを加速度的に増加させる。ヒトは、新しい文化を次々と開発しながら多様な環境へ適応することで地球上で最も広く分布する動物となり、さらに環境を改変・管理し(野生動植物の栽培・家畜化)、最終的には環境を破壊する行動へと歩みを進めてきた。

本書の後半には、現代のヒトが直面する2つの「暗雲」が示される。それはジェノサイド(とりわけヒトによるヒトの大量殺戮)と環境破壊である。1945年8月に広島と長崎に投下された原爆は、現在でもいつ次が引き起こされるのか国際的な脅威として日々ニュースや新聞で取り上げられているが、同様に、環境破壊とそれに伴う生物多様性の喪失についても大きな不安として広く認識されている。いま私たちが直面しているこうした深刻な問題は、ヒトが「大躍進」以後に育んできた文化の本質に根ざしている、と著者は説明する。冷静に見れば、この説明は平凡とも受け取れるのだが、人類の歩みを生物学的な面からも文化的な面からもつぶさに回顧したあとで結論づけられるためか、その言葉には強い説得力があり、人類の破滅の道に対する戒めとして重みを感じさせる。

「おわりに なにも学ばれることなく、すべては忘れられるのか」という悲痛な題名のあとがきでは、環境破壊へ歯止めをかけることができず人類は破滅への道を歩み続けるのではないか、という危惧が吐露されるが、ドイツ人政治家ビスマルクが自身の生涯の回想録に記した「私の子どもと孫へ。過去を理解し、将来の手引きとするために」という言葉が引用されて結ばれる。歴史に学び変化する努力を続けることが私たちの将来を左右する、というのが本書の私たちに向けられた率直なメッセージである。

私が本書を選んだのは、そのメッセージが力強く感じられたからだ。若い読者だけでなく多くの方に一読を勧めたい。

アルカ通信 No.158

発行日 2016年11月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp